

昭和初期日本の仏教ブーム

おおたに えいいち
大谷栄一

1 「仏教ブーム」という既視感

最近「仏教ブーム」といわれる。五木寛之氏の『大河の一滴』（二五二万五〇〇〇部、九八年）、瀬戸内寂聴氏の『寂聴 仏教塾』（三〇万部、九九年）、梅原猛氏の『梅原猛の授業 仏教』（一九万部、〇二年）など、仏教関連の本が相次ぎベストセラー入りしている。座禅や写経の会に人が集まり、滝行や回峰行のような厳しい修行を体験しようという人も少なくない。

これは、二〇〇五年（平成一七）三月一六日の『朝日

新聞』夕刊に掲載された記事「こころのいま オウム事件から10年」（中）の中の記述である。このあと、記事では文化人類学者の上田紀行、曹洞宗僧侶の南直哉、社会学者の大澤真幸各氏の発言を紹介しながら、この仏教ブームの背景には、現代日本に広がる「むなしさ」や「生き難さ」がオウム真理教（現・アレーフ）信者のような若者のみならず、一般の年長世代にも広がっていること、そして「修行」体験に取り組む人々には、生きることの困難に対して、生の実感を求めるといふ共通した思いがあるのではないかと指摘されている。

現代日本の「仏教ブーム」はたしてそれは本当だろうか。たしかに、二〇〇四年のジャーナリズムの動向を

見ると、仏教の教えや体験を特集する一般誌が目についた。例えば、『文藝春秋』三月号「特別企画 仏教入門」（文藝春秋社）、『一個人』八月号「特集 仏教を愉しむ」（KKベストセラーズ）、『いい旅見つけた』十一月号「特集 心の旅、巡礼の旅」（リクルート）、『考える人』冬号「特集 考える仏教」（新潮社）といった特集が生まれ、日本仏教の僧侶や聖地、名刹を紹介した『週刊朝日百科 仏教を歩く』全三〇巻（朝日新聞社）も売れ行きが好調だったという。また、座禅・写経・写仏・阿字観・滝行・回峰行・巡礼などの修行体験を紹介した本や精進料理のレシピを取り上げた書籍も数多く書店に並んでいる。これだけ仏教に対する注目が高まるというのは、近年の日本社会には見られなかったことである。

じつは戦前、これをしのぐ仏教ブームがあったことはあまり知られていない。今から約七〇年前の一九三四年（昭和九）、突如として、それは起こった。当時は「宗教復興」と言われ、この現象の中核をなすのが「仏教復興」と呼ばれた社会現象、つまり、仏教ブームである。例えば、吉田久一は次のように述べている。

〔一九〕三四（昭和九）年三月一日―一五日にかけて友松円諦が『発句経講義』を、その後を受けて高神覚昇の『般若心経講義』が（ラジオ）放送され、そのたぐい稀な現代的説教に小市民が魅了されたのは事実である。その後出版されてマス・メディアの宣伝もあり、不安の中にあつた小市民に訴えるものがあつて、「仏教復興」を思わしめた。¹⁾

当時の「仏教復興」現象を取り上げたほとんどの研究書で、友松と高神のラジオ聖典講義のヒットとその単行本のベストセラー化が紹介されているが、²⁾（後述するよう）当時の雑誌や新聞も「仏教復興」を含めた「宗教復興」を取り上げ、多くの仏教書が刊行され、人気を博した。また、宗教体験を重視する「類似宗教」（新宗教）の隆盛も顕著だった。

つまり、現代日本の仏教ブームは過去において体験された出来事であり、それは既視感を伴う体験なのである。だが、両者は異なる時代状況の中で起こった現象であり、当然、その内実にも隔たりがある（共通点もある）。近代

の仏教ブームと現代の仏教ブームの共通点と違いはどこにあるのだろうか。

本稿では、時間軸を七〇年前に戻し、昭和初期日本の仏教ブームを検討することにした。「仏教復興」現象に言及している論文や評論を取り上げ、当時の仏教ブームの内実を詳らかにするとともに、「仏教復興」がどのように論じられ、語られたのかを分析することで、当時の仏教ブームにおいて何か問題となったのかを明らかにする。そのうえで、現代の仏教ブームとの比較を行い、近現代の仏教ブームが私たちや私たちの生きる現代社会に問いかけていることを読み解いてみたいと思う。

2 昭和初期の「仏教復興」現象

(1) 起爆剤としてのラジオ講義

昭和九年（一九三四）九月三〇日の『大阪朝日新聞』四面の文化欄には、「宗教読本」その他／＼多くなった宗教書の刊行」という記事が掲載されている。記事には、「宗教復興の運動が急に目ざましく進展してきた。これは現代人のすべてが生活に行詰つてはじめて毅然大悟す

べき宗教の必要を感じてきたのであらうし、また賢明なる多くの宗教家が、現代生活にそぐはない既成宗教の理論や形式を感じて奮起したことによるのもあらう」。

大衆向けの読物としての宗教書類の出版がなかく「多い」とある。その具体例として、高神寛昇の『般若心経講義』（第一書房）や高島米峰の『遺教経講話』（明治書院）、『仏教聖典を語る叢書』全一五巻（大東出版社）、友松円諦の『宗教読本』が挙げられている。高神と高島の著作はラジオ放送によって、数十万の大衆にアップीलした講義」を増補・補正したもので、『仏教聖典を語る叢書』は菊池寛、佐藤春夫、倉田百三、三木清、友松円諦、高神寛昇、岡本かの子、武者小路実篤などの著名人が仏教経典を一人一冊ずつ語るという内容のものである。

そもそも宗教復興が言われ始めるのが、この年の五月頃である。宗教新聞『中外日報』昭和九年五月二日号の一面左下隅に、「宗教復興」と題された小さな記事が載っている。それによれば、「最近「宗教復興」の声が現れ出した。宗教復興の声は現在の資本主義社会の行詰に、その最も内部的な基本的な根柢を持つてゐるんだと思

ふ」とある。なぜ、この年の五月に「宗教復興」が言われ出したのかといえば、三月にJ.O.A.K（東京放送局。現在のNHK）で放送された友松円諦の「発句経講義」が一大ブームを引き起こしたことによる（その講義録をまとめたものが四月一五日付で刊行され、瞬く間にベストセラーになり、五月に話題となったのである）。

友松によれば、二月中旬に放送局から電話があり、翌日、愛宕山にある局へ出かけたところ、三月一日から二週間ほど毎朝三〇分ずつ、仏典の講義をしてほしいとの依頼があり、友松は自らがパーリ語から翻訳した『発句経（ダンマ・パダ）』を話すことに決めた。そして、『発句経』中の一五詩を一日一詩ずつ、一五日間にわたって講義した³。すると、この講義は「教界の内外に異常なセンセーションをまきおこした」のである⁴。

ちなみに、この年の一月から九月にかけて、日本全国のラジオ放送局で放送された「聖典講義及び宗教講演放送」の一覧が『仏教年鑑』昭和一〇年版「仏教復興特輯号」に掲載されているが、友松、高神、高島の講義を含め、八〇名ほどの仏教者や神道家、学者によって講義・

講演がなされたことがわかる。つまり、「宗教復興」は、大正一四年（一九二五）に開局したラジオという新しいメディアによる仏教知識の提供によって多数の聴衆を獲得し、これらの講義・講演が単行本化されたことで、さらに読者を獲得するという、いわば、メディアミックスによってブームが作り出されたのである。

(2) 『宗教復興』論概観 というモノグラフ

ここで、より詳しく「宗教復興」と「仏教復興」について見てみよう。今、私の手元に、越智道順による『「宗教復興」論概観 附「宗教復興論」文献』というモノグラフがある。昭和九年一二月三〇日付で仏教法政経済研究所から公刊されたA五版サイズの六二頁からなる小冊子である。この小冊子は、「宗教復興」の諸現象を「直接研討し批判を加えやうとしたものではなく、むしろ「宗教復興」に対して色々の立場から書かれた最近発表の諸論文を、何等かの系統づけによってまとめたもの」（三頁）である。いわば、「宗教復興」「仏教復興」について語られた言説を整理し、その内容を引用・紹介